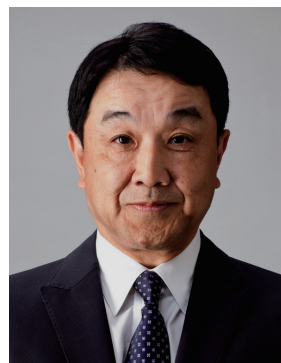


次世代に向けた建築・まちづくり



公益社団法人 日本建築家協会会長 芦原太郎

〈時代の変遷 拡大・成長から縮小・持続へ〉

年頭にあたり、時代は大きく変わって来ていることを痛感します。

私の生まれた1950年には建築基準法と建築士法が制定され、建築の最低基準とその基準をまもる能力を持った建築士を規定して全国一斉に戦後復興が展開されました。1964年の東京オリンピック、1970年の大阪万博の頃は拡大成長の時代となり、高度経済成長の波に乗って都市化や日本列島改造が一気に加速しました。

そして私が独立して自分の設計事務所を構えた1980年代になるとバブル経済、差別化の時代に突入して新しいものや他とは違うデザインがもてはやされ、駆け出しの設計事務所にも多くの仕事が増え込んできました。

しかし最近では賢く縮小させたコンパクトシティや、安心・安全で持続可能な社会づくりが求められるようになり、時代が変われば社会が求める建築のあり方や建築家の役割も変わってきます。

そして、人々は時代の進歩と共に本当に幸せになってきているのかと疑問が残ります。

〈小さな村の物語・イタリア〉

「小さな村の物語・イタリア」というBS番組ですが、ごく普通の村を訪れてそこに暮らす2人の村人の日常生活を紹介するものです。

村を愛し、自分の人生にプライドを持ち満足した生活をしている人々の姿に魅せられ、毎週観てしまいます。

自然や街そして隣人や家族と共に幸せに暮らす姿は、今日の都会のくらしが失いかけているものではないでしょうか。

〈トップダウンからボトムアップへの転換〉

バーナード・ルドフスキーの『建築家なしの建築』はバナキュラーな建築や街の魅力を紹介して、モダニズム建築やインターナショナルスタイルに対する批判的なメッセージが込められていました。学生時代の1970年にこの本を片手にヨーロッパの集落を訪れ、人々が長い時間をかけて積み上げてきた生きた街の魅力に取り憑かれました。同じ頃学んだローレンス・ハルブリンのテークパート・プロセスワークショップは、人々をデザインプロセスに参加してもらって民主的に設計を進める画期的な手法として開発されたものでした。『建築家なしの建築』はトップダウンによる建築や都市づくりへの批判であり、テークパート・プロセスワークショップはボトムアップによる具体的な参加型の設計手法であったわけです。

〈次世代に向けたまちづくり〉

日本ではまちづくりという形でボトムアップによる生活環境改善運動が振興しつつあります。公共建築の設計プロセスに市民参加のワークショップが組み込まれることも増えてきました。まちづくりは全てを包含する曖昧な日本的なものでしたが、米国でもコミュニティ・ベースド・プランニングとして定着しつつあるようですし、中国でも注目され始めています。私達、建築の専門家は地域に根ざした建築・まちづくりを通して、そこに暮らす人々の幸せを願っています。そのためにはそこに暮らす人々をベースとしてボトムアップで建築・まちづくりに取り組み、トップダウンによる計画と上手く折り合いをつけて調停していくことが大切なわけです。日本建築家協会は全国の支部・地域会を中心とした地域に根ざした建築家の活動を通して、次世代に向けた建築・まちづくりに貢献していくことを目指しています。